食料自給が影響？

野生キノコやブルーベリー

内部被ばく 遺伝子損傷か

原発から南東に百四十㌔のエルコフツィー村では、エレーナ・モロシュタンさん(三七)が「心臓が痛い」と話し、長女エフゲーニャちゃん(三つ)もくるぶしの痛みを訴えた。

エレーナさんは放射能に汚染された場所に半年間、住んでいたことがあるが、エフゲーニャちゃんが生まれた同村は「非汚染地帯」とされる。小若さんは「子どもが関節に痛みを覚える以上、放射線の影響も想定せざるを得ない」と続ける。

エフゲーニャちゃん㊧が痛みを訴える足に手を当てる小若順一さん＝5月、ウクライナ・エルコフツィー村で（小若さん撮供）

「ウクライナの田舎では食料の自給率が高い。原発事故のころに妊婦だった女性が汚染された野生のキノコやベリー類などを食べ続け、胎児の遺伝子が傷付き、それが孫の世代まで影響を及ぼしているのではないか」

チェルノブイリの周辺では今も汚染されたものを食べる危険にさらされている。食料品の線量を調査する現地の疫学検証センターの担当者は、日本ペンクラブの視察団に「牛乳や肉の線量は低下しているが、キノコは七万六〇〇〇㏃、ブルーベリーも五二〇〇㏃と異常に高い地域もある。野生動物の肉も線量は高い水準のまま」と説明した。

小若さんは「胎児の細胞の遺伝子を傷付ける食べ物の放射線量、摂取した量や期間を明らかにした研究はあまり知られていない」と指摘。基金は九月二十四日から三回目の現地調査を行い、住民の食べ物の放射線量も本格的に調査している。

これまで牧草地や菜園など二十カ所で放射線量を測ると、平均値は毎時〇・一一五㍃なのに、

「原発事故に関心を持ち続けて」と話すエレーナ・ポタポワさん

放射線の影響が疑われる健康被害も出ている。

小若さんは「福島県内に毎時〇・一一五㍃を超える地域は多い。現時点では、妊婦がウクライナの農村のような自給自足の生活を送った場合、子どもの健康に害を及ぼす可能性を肝に銘じる必要がある」と警告する。

福島原発事故の子どもの健康への影響をめぐっては、甲状腺検査で一人が甲状腺がんで、ほかにしこりも多く見つかっている。小若さんは国などにこう注文を付ける。

「チェルノブイリの事例からも、放射線が人体にどのような影響を及ぼすのか、解明されていない点は多い。対応の遅れで正真正銘の被害者を出さないためにも、子どもの健康被害の可能性を最大限にくみ取って対応や調査をしてほしい」

事故に関心持ち続けて

そのウクライナでは原発事故の記憶が風化しつつあるという。「時間がたつほど原発事故の被害は見えなくなる」。同国出身で、東京で通訳業を営むエレーナ・ポタポワさん(四〇)が話す。

原発事故の時はキエフで暮らしていたが、父親の計らいで別の場所に一時避難した。日本に住んで約十年になるが、二度も原発事故を経験した。

「都会の人は事故を忘れがち」。エレーナさんには、福島原発事故の前のにぎわいを取り戻した東京がそう見えて訴える。

「チェルノブイリや福島では時間は止まったまま。事故に関心を持ち続け、放射線の被害で苦しんでいる人たちを支援することが大事です」

前出の中村さんは、福島第一原発の周辺自治体などを帰還のために除染する方針に異を唱える。

「チェルノブイリ周辺も除染して農業の再開を試みたが結局、諦めて移住したケースが多い。広大な森林は手付かずで汚染されたまま。放射性物質は消えず、除染は気休めにすぎない。除染事業が新たな大手業者の『利権の巣』にならないようにしなければならない」

デスクメモ

中村さんは参院議員時代、脱原発を唱え、いち早く再生可能エネへの転換を説いた。小中学のころの十年間を福島県いわき市で過ごす。その浜通りの人びとは放射能汚染で追われた。「気分が鉛のように重い。晩年にこんな思いをするとは」。思い出の詰まった故郷の再生にペンで訴えていくつもりだ。（呂）

26年後のチェルノブイリ 報告

原発事故でまき散らされた放射能汚染は、子どもらの健康をいかにむしばむのか。事故から二十六年後のチェルノブイリを視察した日本の作家やNPO法人が、現在進行形の被害や苦しみを相次いで報告している。福島の子どもらに、同じ悲劇を繰り返させてはならない。学ぶべきものとは。（林啓太）

健康被害 3世代に

8歳児 心臓、甲状腺に障害

「高い放射線量で内部被ばくした女性の子どもたちのほとんどに健康被害があった。悲劇だ」

俳優で作家の中村敦夫さん(七三)が険しい表情で語る。

日本ペンクラブの環境委員長として、浅田次郎会長らと四月中旬から一週間の日程でウクライナを訪れた。一九八六年四月に事故を起こしたチェルノブイリ原発の廃虚やその周辺を巡り、健康被害に苦しむ住民や医師らに話を聞いた。

原発から南に約百㌔離れた首都キエフ郊外にウクライナ内分泌代謝研究所がある。面会した男性(三七)は事故当時八歳で、二十年以上もたってから甲状腺がんを発症した。

テレシェンコ医師によると、事故時に十八歳以下の人に施した甲状腺の手術は九〇年に六十四件を数えたが、一〇年に約七百件が二〇一〇年に約七百件に上った」と説明した。

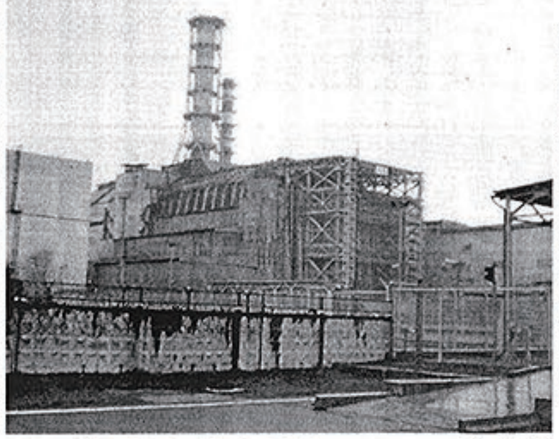
小児甲状腺がんは、飲食を通じて放射性ヨウ素を喉にある甲状腺に取り込み、細胞ががん化した病気だ。事故の四年後ぐらいから急増し、九〇年半ばをピークに減った。ところが当時の子どもが大人になった今、甲状腺がんを多発している。半減期が長いセシウムが蓄積されて被ばくしているとの報告書もある。

小児甲状腺がんは国際的に原発事故との関連が認められている。中村さんは「後から発症する人も放射線との関連を疑うべきだ」と指摘する。

日本ペンクラブの視察団はほかに、事故から約二十年もたって生まれた子どもに、放射線の影響をうかがわせる障害があることを報告している。

原発から西に約八十㌔のナロジチ市で、市民病院の近くに住むブラート君(六)。心臓や甲状腺に障害があり、生後四カ月をはじめに五回も手術を受けた。年の離れた二人の姉も甲状腺に障害がある。母親は事故時、十代後半だった。中村さんは

チェルノブイリを視察した時のことを話す中村敦夫さん



石棺で覆われたチェルノブイリ原発＝中村さん撮供

「ほかにも筋肉まひや発達障害など、さまざまな病気に苦しむ子どもたちがいた」と話す。

足首や関節に痛み訴える子

同様の健康被害は、NPO法人「食品と暮らしの安全基金」（さいたま市）も現地で把握した。原発事故を経験した女性の孫の世代までを対象とした健康調査を今年二月に開始。五～六月には、原発の半径約百五十㌔の八つの村で、十四家族の六十一人や小学生らに聞き取りした。

放射線の健康被害の研究は、がんや心臓病、白内障などの症例が知られているが、小若順一代表(六二)は「幼児や児童らが足首や関節に痛みを抱えるケースも多いことが分かった」と明かす。

原発から百二十㌔ほど西にあるモジャリ村。約二十人の小学生に「脚が痛くなる人は」と聞くと半数近くが手を挙げた。膝、すねやくるぶしに痛みを感じると言い、痛む箇所を指さしたりさすったりしてみせたという。